Bulletin of the Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University (Psychology and Human Development Sciences) 2006, Vol. 53, 133 − 140.

青年期における友人関係への動機づけの発達的変化

── 横断的データによる検討[1] ──

岡　田　　涼[2]

問題と目的

これまで，友人関係の重要性が繰り返し指摘されてきた。Hartup & Stevens (1997) によれば，友人は自尊心や well-being を促進する認知的，感情的な資源であり，年齢段階に応じた発達課題の達成を助けるものであるとされている。特に青年期においては，友人が両親などに替わって最大のサポート源として機能することが示されており (Furman & Buhrmester, 1992; Hunter & Youniss, 1982)，友人関係が個人に与える影響がもっとも大きくなる時期であるといえる。

友人関係の形成や維持に関わる要因の1つとして，友人関係に対する動機づけがある。人は，様々な理由から友人関係を形成することに動機づけられ，実際に友人に対して働きかけていくと考えられる。また，形成された友人関係を維持していくためには，友人に対して積極的に働きかけ，友人との間で相互作用を行う必要があると考えられるが，ここでも動機づけの要因は重要な役割を果たしているだろう。

近年，友人関係を含め，対人関係領域における動機づけを多面的に捉えた理論的枠組みとして“自己決定理論 (Self-Determination Theory; Ryan & Deci, 2000)”がある。ここでは，対人関係を形成し，他者と相互作用を行う理由の観点から，いくつかの異なる動機づけが概念化されている。1つ目は，“外的調整 (external regulation)”である。これは，外的な報酬を得るためや，他者からの働きかけによって対人関係を形成，維持しようとするものである。自身から他者に対して働きかけるのではなく，相手が話しかけてくるために関係が継続している場合がこれにあたる。2つ目は“取り入れ的調整 (introjected regulation)”である。この動機づけは，不安や恥などの感情から，あるいは自尊心を維持するために，他者との関係を保とうとする場合である。友人がいないと恥ずかしいと強く感じて相手に接近するものは，取り入れ的調整によって友人関係形成に動機づけられているといえる。3つ目は“同一化的調整 (identified regulation)”である。ここでは，相手との関係に対する重要性を感じ，積極的な価値づけを行うことによって，他者との関係に動機づけられる。同一化的調整によって動機づけられている状態は，相手といることで幸せになれると感じており，関係の大切さを認識している場合である。4つ目は“内発的動機づけ (intrinsic motivation)”である。これは，相手に対する興味や楽しさなどのポジティブな感情から，相手との関係そのものを目的として積極的に動機づけられるものである。内発的に動機づけられている場合，他者との会話や相互作用を楽しいものであると感じ，相手との関係自体が目的となっている。これらの動機づけは，自律性の程度から一次元上に位置づけられ，内発や同一化などの自律的な動機づけをもっているほど望ましい結果を導くことが仮定されている (Ryan & Deci, 2000; Vallerand, 1997)。

対人関係に対する動機づけを扱った実証研究としては，成人のカップルを対象とした研究がある (Blais, Sabourin, Boucher, & Vallerand, 1990; Levesque, Laliberté, Pelletier, Blanchard, & Vallerand, 2003)。これらの研究では，カップルにおいてパートナーとの関係に対する自律的な動機づけは，主観的幸福感を高め葛藤を抑制するなどの適応的側面に影響することが明らかにされている。例えば，Blais et al. (1990) は，成人のカップルを対象に，パートナーとの関係に対する動機づけと幸福感との関連を検討している。その結果，男女ともに同一化や内発などの自律的な動機づけから関係を継続しているものは，より適応的な行動を多く行うことで，お互いの幸福感が高められていた。このように，対人関係を考えるうえで，他者との関係に対する動機づけは，適応的な行動や感情に影響し得る重要な要因であ

1）本研究のデータは，岡田 (2005, 2006a, 2006c) のデータの一部を再分析したものである。

2）名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程（後期課程）

るといえる。

青年期の友人関係場面においても，自律的な動機づけの重要性が示されている。Richard & Schneider (2005) は，中学生において友人関係への自律的な動機づけが高いものは，孤独感が低く，友人からより好まれていることを報告している。他にも，友人関係場面における自律的な動機づけは，友人に対する向社会的行動や自己開示などを促進することが明らかにされている（岡田，2005，2006a)。これらの結果から，友人関係場面における自律的な動機づけは，友人に対する積極的な関わりを増大させることで，ポジティブな関係を形成し，その結果として心理的適応を維持する役割を果たしていると考えられる。そのため，青年期において，友人関係に対する動機づけは検討すべき重要な要因であるといえるだろう。

一方，友人関係の特徴を検討した一連の研究からは，同じ青年期であっても，年齢によって友人関係の様態や特徴には，質的にも量的にも差が見られることが指摘されている（Hartup & Steevens, 1997)。質的な変化に関するものとしては，自己開示や援助行動，同調行動などの友人関係の特徴が，それぞれの年齢段階においてどのように増減するかを検討した研究が見られる (Brown, Clasen, & Eicher, 1986; Hunter & Youniss, 1982)。質的な変化に言及したものとしては，友人概念の構造的変化を検討したものや（楠見・狩野，1986)，各年齢段階にける友人関係の様態を記述したもの（保坂・岡村，1986）がある。

このように，友人関係には質的，量的な側面での発達的差異があることが明らかにされている。友人関係に対する感情的側面や期待における発達差が報告されていることを考えれば（榎本，1999; 和田，1996)，友人関係への動機づけに関しても年齢段階による相違があることが予想される。特に，学習などの他領域での動機づけ研究では，青年期を通じて動機づけに同一の枠組みが想定されていることを鑑みれば（e.g., Hayamizu, 1997; Vallerand & Bissonnette, 1992)，友人関係に対する動機づけのそれぞれの側面において量的な変化が見られる可能性が考えられる。

友人関係への動機づけの変化の方向性については，いくつかのパターンが考えられる。発達に伴って全体的な自律性が獲得されていくというプロセスを仮定するのであれば，友人関係に対する動機づけに関しても，中学生から大学生に向かうに従ってより自律的なものになっていくことが考えられる。一方で，学習やスポーツなどの領域において，大学生でも自律的でない動機づけをもつものは相当数存在することを考えれば（Pelletier, Fortier, Vallerand, Tuson, Brière, & Blais, 1995; Vallerand & Bissonnette, 1992)，必ずしも発達にしたがって自律的な動機づけが単調増加を示すとは限らない。例えば，学習への動機づけに関しては，中学から高校への移行において，同一化的調整や内発的動機づけなどの自律的な側面と同時に，取り入れ的調整や外的調整なども低下する傾向が見られることが報告されている (Otis, Grouzet, & Pelletier, 2005)。これまで，自己決定理論の枠組みから友人関係への動機づけを検討した研究は少ないため，変化の方向性について明確な予測をたてることは困難である。そこで，本研究では，友人関係への動機づけの発達的変化について，横断的なデータから探索的に検討することを目的とする。

また，上述のように，自律的な動機づけは，自己開示などの友人に対する積極的な行動を促進することで，ポジティブな友人関係の形成に寄与することが考えられる。そのため，友人関係に対して自律的な動機づけをもつものは，自身の友人関係をより充実したものであると感じていることが予想される。ここでは，自律的な動機づけと友人関係に対する充実感との関連についても，発達差を考慮したうえで検討する。

ところで，自己決定理論における動機づけに関しては，個々の動機づけ特性としてだけではなく，個人を複数の動機づけからプロフィールとして記述する動機づけスタイルの有効性が示唆されている（岡田・中谷，2006)。行動に従事する理由を自己決定性という一次元のみから考えるだけではなく，動機づけを多面的に捉える視点も行動に対して高い説明力をもつと考えられる。しかし，友人関係への動機づけスタイルを検討した研究はこれまで見られず，友人関係場面においてどのような動機づけスタイルが存在するかは明らかにされていない。加えて，動機づけスタイルが年齢段階によって異なる可能性も考えられる。

以上の議論を踏まえ，本研究では中学生から大学生を対象に，①友人関係への動機づけの各側面の発達的変化，②友人関係への動機づけと友人関係に対する充実感との関連，③どのような動機づけスタイルが存在するか，について横断的なデータから検討することを目的とする。

方　法

対象者

中学生430名，高校生670名，大学生488名の合計1588名に対して回答を依頼した。欠損値の見られた対象者を省き，最終的に中学生373名（男性189名，女性184名)，高校生624名（男性244名，女性378名，不明者2名)，大学生468名（男性202名，女性264名，不明

者２名）の合計1465名を分析対象とした。

質問紙

①友人関係への動機づけ　岡田（2005）によって作成された「友人関係への動機づけ尺度」を用いた。この尺度は，友人関係をもつことや友人に働きかける理由を尋ねるものである。教示は，「なぜ友人と親しくしたり，一緒に時間を過ごしたりしますか？」であり，それぞれの理由について“あてはまらない”から“あてはまる”の５件法で回答を求めた。なお，ここでの友人は特定の友人ではなく，全般的な友人関係を対象としている。尺度は，外的，取り入れ，同一化，内発の４下位尺度各４項目からなる。原尺度は大学生を対象として作成されていたため，高校生と中学生への実施にあたっては，各協力校の担当教諭に項目表現が適切であるかどうかを検討してもらい，一部表現を修正した。

②友人関係に対する充実感　黒田・桜井（2003）において用いられた「友人関係における充実感尺度」４項目を用いた。この尺度は，友人関係に対する充実感や満足感を測定するものである。回答方法は，“あてはまらない”から“あてはまる”の５件法であった。なお，実施時間の制約上，この尺度は中学生と高校生にのみ実施された。

手続きと調査時期

中学，高校，大学のいずれにおいても，授業時間や講義時間，ホームルームの時間を利用して，担当の教諭，教員によって依頼をしてもらい，一斉に実施した。実施時期に関して，中学生は2005年６～７月，高校生は2004年12月～2005年１月，大学生は2004年10～11月であった。

結　果

尺度構成

各下位尺度について，全対象者のデータをもとにα係数を算出した。その結果，α = .69～.85であった。次に，学校段階ごとにα係数を算出したところ，中学生ではα = .76～.87，高校生ではα = .63～.83，大学生ではα = .62～.86であった。いずれの学校段階においても一定の信頼性を有することが示されたため，それぞれ4項目の加算平均をもって下位尺度得点とした。全対象者のデータをもとに下位尺度間の相関係数と記述統計量を算出した。その結果，先行研究（Blais et al., 1990; Ryan & Connell, 1989）に一致する相関パターンが見られた。

友人関係に対する充実感について，４項目でのα係数を算出した。その結果，中高生全体でα = .86であり，中学生のみではα = .82，高校生のみではα = .87と高い信頼性を有することが示されたため，4項目の加算平均を“友人充実感”得点とした。

動機づけの各側面の発達的変化

学校段階（中学・高校・大学）を独立変数，各動機づけ得点を従属変数として，多変量分散分析を行った。その結果，学校段階の多変量主効果が有意であった（λ = .98, F(8, 2918) = 4.39, p<.001)。動機づけの下位尺度ごとに分散分析を行ったところ，同一化（F(2, 1462) = 3.01, p<.05）と内発（F(2, 1462) = 8.43, p<.001）に学校段階の主効果が見られ，多重比較（TukeyのHSD法）の結果，同一化に関しては中学生が高校生よりも高く，内発に関しては中学生が高校生と大学生に比して高い値を示した。下位尺度ごとの平均得点をTable 1に，各動機づけごとに標準化した得点をFigure 1に示す。

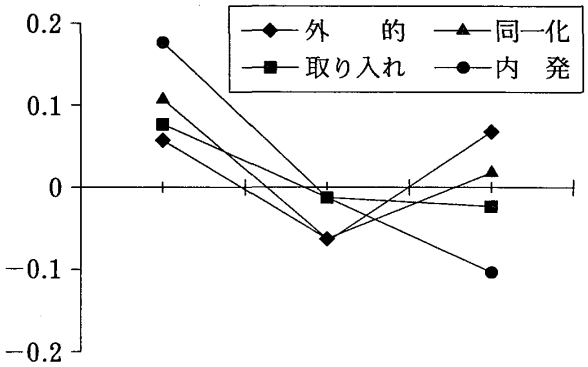

Figure 1　友人関係への動機づけの発達的変化（標準化得点）

Table 1　学校段階ごとの動機づけ得点

	中学生		高校生		大学生		全　体		F
	Mean	*SD*	*Mean*	*SD*	*Mean*	*SD*	*Mean*	*SD*	
外　的	2.10	.82	2.02	.69	2.11	.64	2.07	.71	2.66
取り入れ	3.24	.98	3.15	.90	3.14	.88	3.17	.92	1.36
同一化	4.01[a]	.86	3.87[b]	.89	3.93[ab]	.74	3.93	.84	3.01*
内　発	4.60[a]	.59	4.47[b]	.73	4.41[b]	.66	4.49	.68	8.43***

※ 同じ文字をもつ平均値間の差は有意ではない。　　*p<.05, ***p<.001

動機づけと充実感との関連

各動機づけの下位尺度得点と友人充実感との関連について，中学生と高校生のそれぞれにおいて相関係数を算出した。中学生においては，同一化（$r = .40$, $p < .001$）と内発（$r = .50$, $p < .001$）が有意な正の相関を示した。高校生においては，外的が有意な負の相関（$r = -.13$, $p < .01$）を，取り入れ（$r = .17$, $p < .001$），同一化（$r = .58$, $p < .001$），内発（$r = .60$, $p < .001$）が有意な正の相関を示した。2つのサンプルにおける相関係数の差を検討したところ，取り入れ（$z = 2.31$, $p < .05$），同一化（$z = 3.64$ $p < .001$），内発（$z = 2.19$, $p < .05$）に関して高校生の方が中学生よりも有意に高かった。

動機づけスタイルの検討

岡田・中谷（2006）と同様に，個人がもつ友人関係への動機づけを動機づけスタイルとして記述するために，4つの動機づけ得点をもとにクラスター分析を行った。ここでは，対象者が大規模であるため，SPSSによるQUICKCLUSTERを用いて，クラスター数を2から6まで変化させ順次検討した。その結果，クラスターの解釈可能性から4クラスター解を採用することとした。

クラスターを独立変数，4つの動機づけ得点を従属変数として，多変量分散分析を行ったところ，多変量主効果は有意であり（$\lambda = .11$, $F(12, 3857.80) = 427.19$, $p < .001$），すべての動機づけ得点に対してクラスターの主効果が見られた（Table 2）。クラスター1（$n = 128$, 8.73%）は，すべての動機づけが低く，“低動機づけ”スタイルと解釈できる。クラスター2（$n = 448$, 30.58%）は，同一化と内発の値が大きく，“自律的動機づけ”スタイルと解釈できる。クラスター3（$n = 346$, 23.62%）は，外的と取り入れが相対的に高いため，“統制的動機づけ”スタイルと解釈できる。クラスター4（$n = 543$, 37.06%）は，外的を除いてすべての動機づけが高いため，“高動機づけ”スタイルと解釈できる。クラスターごとの動機づけ得点をFigure 2に示す。

学校段階×動機づけスタイルのクロス表を作成し，χ^2検定を行った。その結果，学校段階と動機づけスタイルとの間には偏りは見られなかった（$\chi^2(6) = 10.20$, *n.s.*）。

動機づけスタイルごとの友人充実感

友人充実感に対して，学校段階（中学・高校）×動機

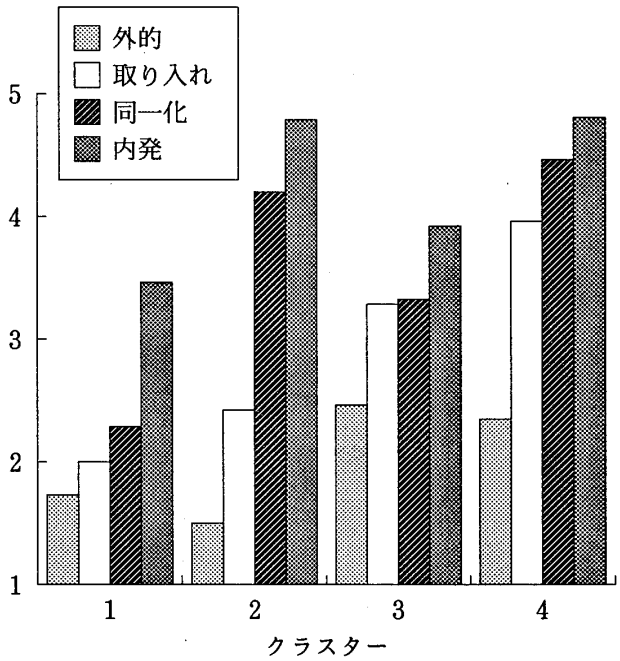

Figure 2　クラスターごとの動機づけ得点

Table 2　クラスターごとの動機づけ得点

	1		2		3		4		F値	多重比較
	Mean	*SD*	*Mean*	*SD*	*Mean*	*SD*	*Mean*	*SD*		
外　的	1.73	.60	1.50	.41	2.49	.59	2.34	.67	266.20***	3>4>1>2
取り入れ	2.01	.66	2.43	.61	3.29	.53	3.97	.52	813.65***	4>3>2>1
同一化	2.30	.68	4.19	.56	3.33	.50	4.47	.41	844.78***	4>2>3>1
内　発	3.40	.96	4.80	.29	3.93	.56	4.83	.27	589.20***	2,4>3>1

***$p < .001$

Table 3　クラスター×学校段階ごとの友人充実感得点

	1		2		3		4		全　体	
	Mean	*SD*	*Mean*	*SD*	*Mean*	*SD*	*Mean*	*SD*	*Mean*	*SD*
中学生	3.57	.97	4.26	.70	3.61	.76	4.29	.61	4.09	.76
高校生	2.82	1.11	4.17	.65	3.39	.77	4.14	.71	3.84	.89
全　体	3.01	1.12	4.21	.67	3.47	.77	4.20	.68	3.93	.85

づけスタイルの2要因分散分析を行った（Table 3）。その結果，学校段階の主効果（$F(1,989)=25.94$, $p<.001$），クラスターの主効果（$F(3,989)=77.33$, $p<.001$），および学校段階×クラスターの交互作用（$F(3,989)=3.89$ $p<.01$）が有意であった。交互作用が有意であったので，学校段階ごとに，クラスターの単純主効果を検討した。中学生（$F(3,989)=21.06$, $p<.001$）については，自律的動機づけスタイルと高動機づけスタイルが，低動機づけスタイルと統制的動機づけスタイルよりも有意に高い値を示した。高校生（$F(3,989)=84.90$, $p<.001$）については，自律的動機づけスタイルと高動機づけスタイルが，低動機づけスタイルと統制的動機づけスタイルよりも高く，統制的動機づけスタイルが低動機づけスタイルよりも高かった。

考　察

本研究では，青年期における友人関係への動機づけの発達的変化について，横断的データから検討した。最初に，動機づけの各側面が学校段階によってどのように異なるかを調べた。次に，動機づけの各側面と友人関係に対する充実感との関連について検討した。最後に，友人関係への動機づけを動機づけスタイルとして記述することを試みた。

友人関係への動機づけの各側面では，同一化的調整と内発的動機づけに関して学校段階による差異が見られ，いずれも中学生において高い傾向が見られた。友人関係は，その性質として「自発性」をもつ関係であり（遠矢，1996），また学習などの領域に比して内発的に動機づけられやすい活動領域であるとされている（Chandler & Connell, 1987）。そのため，基本的に友人関係は，内発的動機づけや同一化的調整による自律的な動機づけによって形成され，維持されやすいものであると考えられる。発達的に見て比較的早い段階にある中学生の時期には，そのことを反映し，多くの生徒が相手に対する重要性や個人的な興味に基づいて友人関係を形成していることが推察される。しかし，高校や大学へと進むにつれて，友人との関係はより複雑化し，多様なものとなっていく。例えば，青年期における友人とのつきあい方の発達的変化について検討した落合・佐藤（1996）は，高校生の時期は友人関係の転換期であり，様々な友人関係が混在していることを示している。そのような多様化する人間関係においては，友人関係全般に対して自律的な動機づけのみから従事することが次第に難しくなり，自律的な動機づけの側面が低下するのであると考えられる。

次に，動機づけと友人関係に対する充実感との関連について検討した。その結果，同一化的調整や内発的動機づけなどの自律的な動機づけと充実感との間に正の相関が見られた。これまでの研究では，自律的な動機づけが友人に対する向社会的行動や自己開示を促進することが明らかにされている（e.g., 岡田，2005，2006a）。これらの知見とあわせて考えるならば，自律的な動機づけは向社会的行動や自己開示などの友人に対する積極的な行動を促進することで，ポジティブな友人関係を形成し，充実感を高めているという一連のプロセスを想定することができる。一方で，高校生においてのみ外的調整と取り入れ的調整も充実感と関連しており，学校段階によって動機づけと充実感との関連が異なる部分も見られた。この結果は，友人関係への動機づけの果たす役割が，年齢段階によって若干異なる可能性を示唆している。例えば，高校生においては，不安や自我関与的な動機づけも適応的な行動を促進することで，ポジティブな関係の形成に寄与していることも考えられる。友人関係への動機づけの役割に関する発達差については，今後検討すべき課題の1つである。

また，動機づけの各側面のパターンから，4つの動機づけスタイルを見出した。ここでは，外的調整や取り入れ的調整などが高い統制的動機づけスタイル，同一化的調整や内発的動機づけなどの自律的な動機づけが高い自律的動機づけスタイルの他に，比較的すべての動機づけが低い低動機づけスタイルと，取り入れ的調整から内発的動機づけまでの動機づけを同時に高くもつ高動機づけスタイルが見られた。これら4つの動機づけスタイルは，学習への動機づけスタイル（岡田・中谷，2006）とほぼ同様の特徴をもつものである。この中で，自律的な動機づけが高い2つのスタイル，自律的動機づけスタイルと高動機づけスタイルは，他の動機づけスタイルに比して，友人関係に対する充実感が高い傾向が見られた。

友人関係に対する動機づけの発達的変化について，動機づけの各側面をみた場合，学校段階による差異が見られた。しかし，学校段階による効果量は極めて小さく，学校段階による説明率は低いといえる。また，動機づけスタイルの観点から検討すると，学校段階と動機づけスタイルの比率との間には偏りはなく，中学生から大学生までいずれの段階においても，同様の動機づけスタイルが存在しているといえる。以上の点から，友人関係への動機づけに対する発達差は，それほど大きなものではなく，青年期の各段階においてそれぞれの動機づけが友人関係場面において機能していると考えられる。これまで，様々な社会的要因やパーソナリティ要因が，対人関係面での動機づけに影響することが報告されている（e.g., 岡田，2006b; Soenens & Vansteenkiste, 2005; Vallerand, 1997）。そのため，友人関係への動機づけ

を考えるうえでは，直接発達差を問題にするよりも，それぞれの年齢段階において，友人関係への動機づけに影響し得る社会的要因やパーソナリティ要因について検討することの方がより重要かもしれない。

ただし，友人関係への動機づけとの関連が，年齢段階によって異なる可能性には注意する必要がある。本研究において，動機づけの各側面および動機づけスタイルと，友人関係に対する充実感との関連は，中学生と高校生で若干異なっていた。友人関係への動機づけと他の要因との関連が，各年齢段階によってどのように異なるのかについては，今後さらに検討する必要があるだろう。

本研究の主な問題点は次の2つである。1つ目は，“友人”の意味に関する相違の可能性について考慮していないことである。本研究では，いずれの年齢段階においても，個人が友人関係全般に対してもつ動機づけ志向性を扱うことが目的であった。そのため，すべての年齢段階において，友人関係に対する動機づけを包括的な概念として位置づけた。しかし，実際には年齢段階によって，友人として捉えられる関係は若干異なる可能性があり，その点を詳細に検討したうえでさらに発達的変化を検討する必要がある。2つ目は，対象者が限定されていることである。青年期における友人関係は，学級や学校の風土の影響を受ける可能性があり，また動機づけに対しては環境的，社会的要因が強く影響することが仮定されている（Ryan & Deci, 2000; Vallerand, 1997）。そのため，友人関係への動機づけに関しても，複数の異なるサンプルを用いて検討する必要があるだろう。3つ目は，本研究のデータは横断的なものであることである。友人関係への動機づけに関して，個人の連続的な変化を検討するうえでは，縦断的な調査を行う必要がある。今後は，個人を追跡調査するなどして，友人関係への動機づけの変化について検討することが求められる。

引用文献

Blais, M. R., Sabourin, S., Boucher, C., & Vallerand, R. J. 1990 Toward a motivational model of couple happiness. *Journal of Personality and Social Psychology,* **59**, 1021-1031.

Brown, B. B., Clasen, D. R., & Eicher, S. A. 1986 Perceptions of peer pressure, peer conformity dispositions, and self-reported nehavior among adolescents. *Developmental Psychology,* **22**, 521-530.

Chandler, C. L., & Connell, J. P. 1987 Children's intrinsic, extrinsic, and internalized motivation: A developmental study of children's reasons for liked and disliked behaviours. *British Journal of Developmental Psychology,* **5**, 357-365.

榎本淳子　1999　青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達的変化　教育心理学研究，**47**, 180-190.

Furman, W., & Buhrmester, D. 1992 Age and sex differences in perception of networks of personal relationships. *Child Development,* **63**, 103-115.

Hartup, W. W., & Stevens, N. 1997 Friendships and adaptation in the life course. *Psychological Bulletin,* **121**, 355-370.

Hayamizu, T. 1997 Between intrinsic and extrinsic motivation: Examination of reasons for academic study based on the theory of internalization. *Japanese Psychological Research,* **39**, 98-108.

保坂　亨・岡村達也　1986　キャンパス・エンカウンター・グループの発達的・治療的意義の検討　心理臨床学研究，**4**, 15-26.

Hunter, F. T., & Youniss, J. 1982 Changes in function of three relations during adolescence. *Developmental Psychology,* **18**, 806-811.

黒田祐二・桜井茂男　2003　中学生の友人関係場面における目標志向性と抑うつとの関係に介在するメカニズム－ディストレス／ユーストレス生成モデルの検討　教育心理学研究，**51**, 86-95.

楠見幸子・狩野素朗　1986　青年期における友人関係概念発達の因子分析的研究　九州大学教育学部紀要（教育心理学部門），**31**, 97-104.

Levesque, C., Laliberté, M. L. N., Pelletier, L. G., Blanchard, C., & Vallerand, R. J. 2003 Harmonious and obsessive passion for the internet: Their associations with the couple's relationship. *Journal of Applied Social Psychology,* **33**, 197-221.

落合良行・佐藤有耕　1996　青年期における友達とのつきあい方の発達的変化　教育心理学研究，**44**, 55-65.

岡田　涼　2005　友人関係への動機づけ尺度の作成および向社会的行動への影響－自己決定理論の枠組みから　パーソナリティ研究，**14**, 101-112.

岡田　涼　2006a　自律的な友人関係への動機づけが自己開示および適応に及ぼす影響　パーソナリティ研

究, **15**, 52-54.

岡田　涼　2006b　自律的な友人関係への動機づけの基礎としての親和動機　日本発達心理学会第17回大会発表論文集, 268.

岡田　涼　2006c　友人関係への動機づけが学業的援助要請に及ぼす影響　日本教育心理学会第48回総会発表論文集, 612.

岡田　涼・中谷素之　2006　動機づけスタイルが課題への興味に及ぼす影響－自己決定理論の枠組みから　教育心理学研究, **54**, 1-11.

Otis, N., Grouzet, F.M.E., & Pelletier, L.G. 2005 Latent motivational change in an academic setting: A 3-year longitudinal study. *Journal of Educational Psychology,* **97**, 170-183.

Pelletier, L. G., Foreir, M. S., Vallerand, R. J., Tuson, K. M., Brière, N. M, & Blais, M. R. 1995 Toward a new measure of intrinsic motivation, extrinsic motivation, and amotivation in sports: The sport motivation scale (SMS). *Journal of Sport and Exercise Psychology,* **17**, 35-53.

Richard, J. F., & Schneider, B. H. 2005 Assessing friendship motivation during preadolescence and early adolescence. *Journal of Early Adolescence,* **25**, 367-385.

Ryan R. M., & Connell, J. P. 1989 Perceived locus of causality and internalization: Examining reasons for acting in two domains. *Journal of Personality and Social Psychology,* **57**, 749-761.

Ryan, R. M., & Deci, E. L. 2000 Self-determination theory and the facilitation of intrinsic motivation, social development, and well-being. *American Psychologist,* **55**, 68-78.

Soenens, B., & Vansteenkiste, M. 2005 Antecedents and outcomes of self-determination in 3 life domains: The role of parents' and teachers' autonomy support. *Journal of Youth and Adolescence,* **34**, 589-604.

遠矢幸子　1996　友人関係の特性と展開　大坊郁夫・奥田秀宇（編）対人行動学研究シリーズ3　親密な対人関係の科学（pp.89-116）　誠信書房

Vallerand, R. J. 1997 Toward a hierarchical model of intrinsic motivation and extrinsic motivation. In M.P. Zanna (Eds.) *Advances in experimental social psychology, vol.29* (pp. 271-360). San Diego: Academic Press.

Vallerand, R. J., & Bissonnette, R 1992 Intrinsic, extrinsic, and amotivational styles as predictors of behavior: A prospective study. *Journal of Personality,* **60**, 599-620.

和田　実　1991　同性への友人関係期待と年齢・性・性役割同一性との関連　心理学研究, **67**, 232-237.

謝辞

本研究を行うにあたりご指導頂きました速水敏彦先生に厚くお礼申し上げます。また，調査の実施にご協力頂きました諸先生方，質問紙にご回答頂きました中学生，高校生，大学生の皆様に心より感謝致します。

（2006年9月29日　受稿）

ABSTRACT

Developmental Changes of Friendship Motivation during Adolescence: A Cross-Sectional Study

Ryo OKADA

The purpose of this study was to examine the developmental changes of friendship motivation during adolescence by a cross-sectional data. The participants were 373 junior high school students, 624 senior high school students, and 468 university students. The results showed that the autonomous aspects of friendship motivation such as identified regulation and intrinsic motivation were higher among junior high school students than senior high school and university students. The autonomous aspects of motivation were positively related to satisfaction with friendship among both junior and senior high school students although the degrees of relations were little different between two samples. Additionally, four motivational styles (autonomous motivational style, controlling motivational style, high motivational style, and low motivational style) were specified based on the individuals' motivational patterns. The developmental features of friendship motivation during adolescence are discussed.

Key words: friendship motivation, developmental change, adolescence, self-determination theory